

高山

たかやま
高山の原生林を守る会

会報 第 73 号

2010年6月



御幸山に登る 佐野一子

3月下旬、参加者 22 名は伊達市月舘地区の御幸山をめざしました。車道をひたすら。途中、切り通しの所で見つけたのが土栗(つちぐり)。ツチグリ科のきのこで秋に山野に生ずる。黒褐色で外皮は厚くあとで6~12の裂片となり星状に開いて地上につま立ち菌体は地面から離れる。乾燥するとまた上方に巻き球形となり転がって内皮から胞子を散らす。味はトリフに匹敵するというおいしいきのこで特にきのこ汁に合うということのを地元から参加の渡辺さんの熱心なお話で「うん、秋にみんなできのこ汁を食べることにしよう!!」

標高が477m。頂上近く杉林に守られて観音堂。重厚なつくりのお堂で慈覚大師のお手による十一面観音菩薩像は秘仏とのこと。大きな鐘をつく。山の頂上はそこから10分程登った羽山神社の奥の院の裏手にあり丁度、お昼近くになってようやく早春の太陽が淡い光をさしてくれて角礫岩のゴツゴツした岩の上で狭いながらもお昼のタイム。間もなく食べ終わった渡辺さんが「笛を吹きます」と言い、リュックからおもむろに笛を取り出しました。まだ木の芽が固い里山の雑木林に



妙なる笛の音がひびいてゆきました。山に来てこんな素敵な時間に会えるなんて、一同しばらくうっとり……。

帰りは表登山道を下りました。秋に落ち葉が重なって足が埋まるほどです。下りきった所に金精様が立っており、「おかげさまで」と別れのあいさつをしました。

国見に住む私の家から真南にこの御幸山があることを知ってからこの山に親近感をもってながめることが楽しみともなっているこの頃です。



第110回 裏磐梯・金山観察会に参加して

高江秀行



ブナの発芽



ブナの幹瘤

観察会最後のミーティングで、観察会の感想文を頼まれ、学生の時の宿題を出されたような感じで、久しぶりの新鮮な感じを受けます。

福島から桧原湖に入り周りの山の木々を見ると若葉が目に入り、ますます観察欲がわいてきます。

最初は桧原城址に向かうコースで入山後すぐ、アオキに皆さん目にとまりました。雄花、雌花の違いの解説がありルーペなども使い皆さん思い思いに観察されています。

登山道にはあちこちにドングリの実の割れた状態がありました。なんと地面に根を出し始めこれから芽を出すところでした。実をさわってみると根が地面に食い込んでいるのが解ります。とても感激したのはきれいに実が割れて若葉が出ているものがありました。新しい命が生まれ、これから成長して大きな木になることを考えると、感慨深いものがあります。

山登りというより植物観察中心ですから、目的の桧原城址にはやっと着いた感じです。伊達政宗が築いたという山城は、敵の攻撃にも配慮した会津侵攻の足がかりとした城といわれています。今でも残る土塁や空堀を見て400年前の昔のことに思いを馳せるのが楽しくもあり、興味がわきます。

桧原城址を後にして、今回の謎であるミステリーツアーに入りました。時々藪をこぎ、流れの速い沢をみんなで助け合いながら渡り、後ずさりするような急登を登り、やっと着いたところは大きなブナの木です。皆さん一緒にブナの木に感激しています。高いところから枝分かれする幹も太くて貫禄があり昼食を含む時間を、ブナと一緒に過ごしたことは幸せでいい思い出になりました。

今回は午後から雨になることも予想され、心配していたのですが何とか雨は降らず、かえって暑くもなく快適な観察会ができたと思います。そして新緑が新鮮でした。

今回で、3回目の参加となりましたが、観察会を通して皆さんからいろんなことを教えていただきありがとうございます。これからも観察会の参加を楽しみにしています。

夏は、仕事の関係でトーンダウンしてしましますが、秋には復帰しますのでよろしくお願いします。

始めの一步

田崎裕子



オクチョウジザクラ

かなり以前から山スキーでは東北の山を訪れてきましたが、観察会は初めての参加です。まず驚きました。皆さんの、見つける眼のすばやさ、観察の細かさ、チームワークの良さにただ感心するばかり。新参組は人の集まっている所に行っては何！何！と覗き込むだけで大忙し。一度にたくさん見たり、聞いたり、はるか昔の‘生物’や‘理科’の教科書がチラチラ浮かんだり、足よりも頭の方が一杯一杯になりました。

混乱しないためにも、ひとつ自分のテーマを決めようと‘木’を選びました。続けていた山スキーも、ただ滑るのが面白いのではなく、樹林の間や標高が下がるにつれ木の種類が刻々と変化していく様子がとても感動的なのです。今までは滑りながら横目でチラッと見るのが精一杯で、木の種類まで覚える余裕はありませんでした。

今回の観察会で二つ覚えるつもりで、まず教えてもらった‘ウリハダカエデ’をマスターしようと「日本の樹木」(小学館)を開いてみたら、あまりに種類がありすぎてすぐに断念しました。結局‘ブナ’と‘カラマツ’と‘ムシカリ’が今回名前と実物が一致する木で、あまりの少なさに愕然としました。

漠然と眺めるだけでなく、見えてくるようになるように、これから機会を重ねていきます。今後ともどうぞよろしく。もうひとつ感心したこと、おすそ分けで回ってきた地の食べ物のおいしかったこと、ありがとうございました。



檜原城散策

コムラサキは生き残れるか

鎌田 和子

月の輪大橋の直下のヤナギ類が皆伐された光景(写真①)を目にするのが嫌で、ずうっとサイクリングロードの散歩を控えていました。でも、伐採を免れた木々の芽吹きはどんなかと心にかかり、4月の日曜日に阿武隈川の左岸を、月の輪大橋の上流へと足を伸ばしました。昨年まで、阿武隈川へ注ぐ蛭田川と八反田川までの河川敷にはエノキやハリエンジュがいい間隔に並び、蛭田川の水門から数えて五番目のクルミの木の根元にはコンロンソウの白い花が咲き、周りのハリエンジュの白いぼつりとした花房からは甘い香りが漂う、楽しみな散歩コースでした。

ところが、冬に樹木が伐採されたため、木々の間隔は大きくズレ、どこがコンロンソウの花がある場所か、すぐには分かりませんでした。それで、水門の辺りにもどって、残った木と伐採されたばかりの真新しい切り株を順に数えました。五番目の木の根元に、なんとコンロンソウが



① ショック！ヤナギの皆伐

芽生えているではありませんか。ハリエンジュが切り倒されたときに踏みつけられたであろう地面から何本も芽を出していました。

小さく白い花から弱々しいイメージを抱いていましたが、コンロンソウは強い植物でした。ホッとしながら歩を進めてまもなく、ふっと見通しのよくなった河川敷を見渡したところ、水辺に近いほうに青々した樹木(写真②)があることに気がつきました。えっ、常緑樹が！？河川敷に常緑樹を見たのは初めてです。そばに行って何の木か確かめなくてはと、踏み込みました。それはシラカシでした。よく見ると、倒れて根っこがむきだし状態(写真③)です。横倒しになっても枝葉は天に向かって青々と伸びています。どんな経路をたどって河原に生えたのでしょうか。もとは一個のシラカシのドングリ。寒風の荒ぶ河川敷に芽生え、何年も生きてきたシラカシ。すごいなあと思いました。ハリエンジュの大木がほとんど伐採されたために視界が開けて、これまで見えなかった常緑樹が見えるようになったのでしょうか。私が今までぼんやりだったのかもしれませんが、伐採後の河川敷の観察にもそれなりに新たな発見と感動が隠れていたことにちよっぴり救われた思いがしました。

しかし、河川敷から緑豊かな樹木が消えてしまったことは寂しいかぎりです。そして、何にもまして気がかりなのは、河川敷に生息していた生き物たちのことです。昨夏、月の輪大橋の歩道で出会ったコムラサキの命は果たして継承されるのでしょうか。コンロンソウやシラカシのようにたくましく生き残れるのでしょうか。後日、思い切って、月の輪大橋の下においてみました。…伸び始めた草に見え隠れするヤナギの切り株(写真④)は、小さな生き物たちの墓標のように思えてなりません。

保全生態学専門の「鷺谷いづみ」さんは、蝶は環境の変化に敏感だから、ある生協と一緒に蝶の観察を進めていると、2010年1月4日の「生物多様性」の記事で述べていました。「蝶を観察すること」が「生物多様性の損失を食い止めること」にどう関わるのかまでは述べられていませんでした。でも今なら、月の輪大橋のヤナギを失った今なら、鷺谷いづみさんの地道な活動の意味がわかる気がします。私が思うに、蝶は環境の変化に敏感だからというのは、例えば、蝶が生息していた場所が破壊されれば、その蝶の食樹や食草が失われることになるでしょう。当然、蝶の個体数は激減し、ひいては絶滅につながることもあるかもしれません。鷺谷さんが「蝶の観察」を進める意図はそういう危機感を多くの人に共有してもらうことにあるのではないのでしょうか。

私がかたま手にした「自然保護」(2010.1・2月号)という冊子に、鷺谷いづみさんが「絶滅が抱える問題」の中で、生物が1種絶滅しただけでは、生態系や生態系サービスに大きな変化はないと思われるかもしれないけれど、決してそうではないのだと、説いています。ドミノ倒しのように絶滅の連鎖が起こる可能性と、それによって自然からの恵みが損なわれ、安全で心身ともに豊かな暮らしを続けることが難しくなると述べています。

小さなコムラサキの命の継承を願ってアレコレ考えているうちに、大きな課題「生物多様性の損失の危機」を実感として捉えることができました。コムラサキは幼虫で越冬するそうなので、今夏、月の輪大橋でコムラサキに出会うことはもうないと思います。…でも、ひょっとして難を逃れた幼虫がいて…、いいえ無理です。幼虫の食樹のヤナギ類がないのです。それでもなお、もしやと期待しては打ち消し、打ち消しては期待し、羽化の季節のころには、月の輪大橋の上でコムラサキを探すことでしょう。(2010.4.30)



②河原にシラカシが！



③横倒しになっても生きる



④墓標のような切り株

鹿狼山から 13 ～鹿狼山で会う人々～ 小幡 仁子

鹿狼山に登り始めてかれこれ 10 年近くなる。始めは海外登山の体力作りのためだった。そのころは 40 分の標準タイムを縮めようと、一度も休まずに登り、25 分くらいで頂上にたどり着いて満足していた。しかし、ここ 5 年くらいは、体力も付きたいが、花を見たり、四季の移り変わりを感じたり、写真に撮ったりするのが好くて鹿狼山に通っている。こんな小さい山だけど思いの外、花や樹木の種類も多く、四季折々に変化があって感動的ですからある。そして、この山に登っていると、様々な人達に出会う。

昨年の秋に、ドライフラワーになったオトコエシの写真撮っていたら「リョウゼントウキを知っているか？」と 60 歳台と思われる男性に声をかけられた。私は「ミヤマトウキとかイワテトウキなら知っていますが、リョウゼントウキは初めて聞きますけど、霊山（りょうぜん）の固有種か何かですか？」と聞き返した。「このあたりに結構あったんだがなあ、花が白くて花火みたいで・・・」ということはシシウドの仲間だ。と思い、記憶の中でもそれらしき物があったので、探しながら、一緒に歩くことになった。道々彼は自分の身の上話をした。

自分は宮城県のある団体の職員として 40 年ほど働いて定年を迎えた。仕事は安定していてそれなりの収入もあった。釣りが好きだったものだから、船を持ってこの辺りの海で魚釣りをして、釣った魚を料理して友達に振る舞って酒を飲むのが楽しみだった。仙台市内にマンションも買った。娘が二人いたが、妻に任せっきりで自分は遊んでばかりいた。そんなこんなしていたら、妻が病気になってしまい、それも助からない病で亡くなってしまった。全く、妻に先立たれた男ほど情けないものはない。娘達はそれぞれに相手ができて結婚し、家を出て行ってしまった。俺は一人になった。

ある時、マンションに一人で住むのがいたたまれない気持ちになって、もう二束三文で売り払って、この近くの海見える町に引っ越してきた。町に馴染もうと思って、止せばいいのに体操クラブのようなものを作って、代表としてやっていたが、そのうちに自分が妙に周囲から浮いているのに気がついた。自分は町ではよそ者だったと思い知らされた。だから、今は体操クラブも辞めたし、ボランティアで行くのは小学校だけにしている。小学生に竹とんぼの作り方を教えたり、コマ回しを教えたりしている。俺の竹とんぼはよく飛ぶから人気があるのだ。

そして、長年の酒飲みが祟って、肝臓を悪くして手術もした。今ではもう酒を飲むこともなくなった。鹿狼山には去年 40 回くらい登った。手術したから昔ほどの体力はない。すぐ息が切れるが、それでも以前よりは楽に登れるようにはなってきた。山はいいなあ。誰に気兼ねもいらぬし、ここから海を眺められるのがいいから・・・。最近、仙台の山の店で登山靴や羽毛服やストックも揃えたところだ。

こんな話を聞いている内に頂上下の休憩所まで来てしまった。彼はザックを開けると、「鹿狼山登山記念スタンプカード」なる物を出した。見れば 20 枚位は持っているようだった。私にどうぞ使ってくださいと言って 5 枚ほどよこした。休憩所にあるスタンプを押すようになっていて、20 回押すと 1 枚が一杯になるスタンプカードだった。私は地元に住んでいるのに、こんなカードがあるなんて全然知らなかった。

お昼時になって休憩所には人が沢山やってきた。彼がよその人と話し出したのを潮に、お礼を言って私は先に山を降りることにした。あんなにカードを持っているのだから、彼は時々、話を聞いてくれそうな人に声をかけては、スタンプカードをくれているのだろう。一人暮らしは孤独で人恋しいのかもしれない。まして、生活圏で自分の存在の不安があれば尚更と推察される。

鹿狼山にはたくさんの方が登る。一人で登っている中高年の男性も女性も多い。人はみんな歳を重ね老いていく。老いることは失うことだとも聞いている。伴侶を失い、健康を失い・・・でも、それは自然なことだ。まだ山歩きができて、自分から相手を求めていけるだけ幸せなのではないか。鹿狼山で小さな幸せを探してほしいものだ。(2010/6/30)



鹿狼山で語り合う



頂上から見える大海原

東北ブナ紀行 (38)

奥田 博

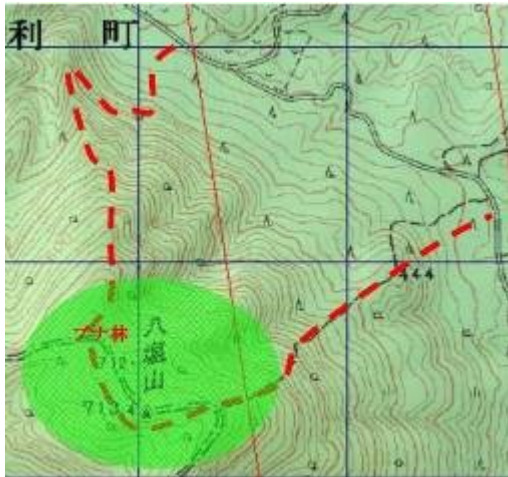
岩手県沢内村で開かれたカタクリの会20周年記念観察会に参加して、帰り足に鳥海山を滑ろうと企んだが、鳥海山は雪と強風で断念。すぐに近くの低山に出かけたのは八塩山だった。春の花と芽吹き前のブナを堪能できた。

74) 八塩山

八塩ダムには黄桜の幟がヒラヒラ風にハタメイテイルが、桜にはまだ早そう。林道奥の登山口から歩き始めるが、スギ林を抜けると、目の前にはブナ林の急斜面が見えてくる。太陽の下ではカタクリやキクザキイチゲが咲いていて、カメラに忙しくなる。急な斜面を登り尾根に出ると、イワウチワの大群がお出迎で、またまたユツタリペース。尾根の直登で高度はグングン上がる。次第に残雪が現われ、その辺からスッキリとしたブナの大木が現われる。尾根の斜面が緩むと、ブナ林は穏やかに広がる。山頂は雪に覆われていたが、東端の八塩神社まで行って大休止とした。村が水不足になると、この八塩神社に参拝し、霊峰鳥海山に向かって雨乞いしたとの言い伝えも残るといふ。

下りは東側に向かって急な登山道を下降するが、雪で道を見失うが、スギ林に入って東に向かうと周回の林道に飛び出した。あとは元の登山口へと戻った。

コースタイム：鳥居ノ沢登山口（50分）山頂（30分）東登山口（30分）鳥居ノ沢登山口



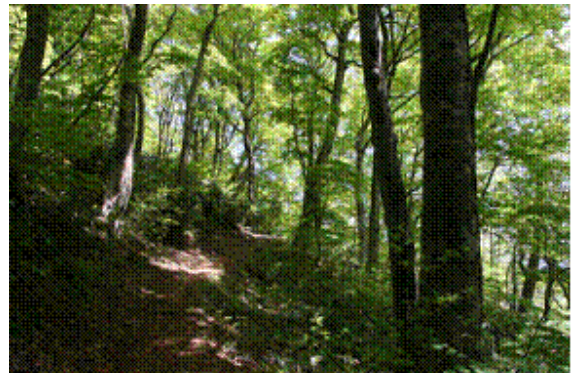
ブナを見上げる

75) 金峰山

山頂に吉野の金峰山から勧請した金峯神社が建つ由緒ある山だ。藤沢周平が教諭時代を過ごした藤沢地区から歩き始める。立派な鳥居を潜り、スギ林の中をたどる。林道を越えると明るく雑木林となり林床には赤いユキツバキの花が現われた。やがて女人禁制の大きな標石を越えるとブナの森に入っていく。まるでこの先は聖地であるかのような変わりようだ。尾根に出ると、林床にユキツバキ、頭上にブナ新緑のトンネルに差し掛かった。この道は、母狩山を経て湯ノ沢岳までブナの縦走路が開かれた。10時間を要するというが、いつかは辿ってみたい。

山頂からは庄内平野を一望に収め、鳥海山、月山、羽黒山、高館山などが見渡せた。ここでたっぷり休んで、東の青龍寺へ向かって下ったが、こちらもブナの道であった。

コースタイム：藤沢登山口（50分）山頂（40分）青龍寺登山口



新緑のブナトンネルの道

ミネザクラ (*Prunus nipponica* バラ科サクラ属)

別名タカネザクラ。標高 1300m 以上のブナ林上部から高山に生育する落葉広葉樹。吾妻・安達太良に植生するサクラの中で、最も高く自然環境の厳しいところで生育する。山に自生するサクラは主幹が直立するタイプが多いが、ミネザクラは分岐性が強く、シャクナゲに似た樹形を示す。日本固有種である。

葉は互生し、未展開葉は赤みを帯びる。葉形は倒卵形で先端は細く長くとがる。葉縁は欠刻状の重鋸歯があり、鋸歯の先は尖り、先端に腺がある。蜜腺の位置は葉柄上部または葉身付け根である。葉身は無毛が標準。



花は腋性で散形花序を形成する。葉の展開と同時に、ひとつの花芽から1~3花を咲かせる。花序の基部には1対の楕円形で鋸歯を持つ苞がある。花弁は5枚、花弁の先端は浅く窪む。花弁の色は白から淡い桃色を帯びる。がく筒はやや釣鐘状で小花柄ともに無毛である。オクチョウジザクラ (*P. adetala* var. *pilosa*) は、花がミネザクラに似た低木性のサクラだが、多雪地の深山の溪流沿いに植生し、がく筒と小花柄ともに開出毛が密生する。

ミネザクラの開花期は早く、雪融けと同時に咲き始める。ミネヤナギが咲き始める頃にはすでに樹の大半の花は盛りを過ぎている。この時期の山の天候は不安定で、花が咲いてから寒波に襲われることもあるため満冠の花を堪能できる機会は多くはない。そのような厳しい環境で幹径 20cm までに成長したミネザクラに出会った。その樹冠は淡桃色の花に覆われ、杯状に大きく広げた枝は、降り注ぐ太陽の光を最大限に受け止めようとしているようだ。周辺ではミヤマスマレが咲きそろい、ともに初夏の訪れを謳歌していた。その後、何度か同じコースを訪ねているが、未だにその場所である花園は再現されていない。

ミヤマホツツジ (*Cladanthus bracteatus* ツツジ科ミヤマホツツジ属)

亜高山から高山の湿地周辺や林縁、岩場などの日当たりのよい所に生育する落葉低木。花の形態が独特で、花の姿が類似するツツジの仲間にはホツツジ (*Elliotia paniculata*) がある。ホツツジは山の中腹に群生し、植生域の標高差は明瞭である。

葉は互生し、葉身は倒卵形で葉縁は鋸歯がなく滑らかである。葉先は丸く、尖らない。これに対し、ホツツジはミヤマホツツジより葉が大型でひし形状、ミツバツツジの葉を少し伸ばしたような形をしており、葉先は尖る。枝の先端部の葉は節間がつまる。また枝には稜がある。

花は頂性で穂状花序を構成する。小花は数個で小花柄の基部には1対の苞がある。がくは5裂し、花冠は基部から3裂し、大きく反転する。裂片の色は蕾の頃は先端が赤みを帯びるが開花すると緑白となる。まれに花冠の色が赤色の個体が見られる。雄しべは6個で花糸は扁平で楕円状となり、中央部に赤い筋がある。雄しべの花糸の形状は小さな花弁に見えるほど存在感がある。雌しべは、雄しべより長く花柱が大きく反転する。ホツツジの花は大型の円錐花序で小花も多い。花冠裂片の色は淡紅色で気品がある。雄しべは扁平だが膨らまず、赤い筋も認められない。雌しべは反転せず花冠からまっすぐに飛び出ている。開花期はミヤマホツツジ(7月下旬)が、ホツツジ(8月初旬~中旬)より早いようである。



初めにその存在感を認めたのはホツツジである。青空を背景にした稜線上のホツツジは、淡紅色のリボンのような花冠と長い雌しべが織りなす紡錘形のシルエットが爽快な夏山を象徴しているように感じた。ミヤマホツツジは知っていたが質素で目立たないイメージであった。或る夏の日、体力と釣り合わない山行で疲れ、座り込んだ傍にあったミヤマホツツジに目をやると花弁のような雄しべに気づいた。反転した花冠裂片と赤い筋のある雄しべの幾何学的バランスに感動してしばし見入ってしまった。以来、ミヤマホツツジは私のお気に入りとなった。

第111回自然観察会案内：吾妻慶応山荘・亜高山針葉樹林と湿原植物観察会

日時：2010年7月25日（日）7：00～16：30

集合場所：四季の里交差点正面入り口駐車場 7：00 参加定員 20名

内容：不動沢登山口から慶応山荘まで散策し、夏の亜高山針葉樹林内に咲く高山植物と慶応山荘周辺の湿原植物を観察します。

準備品：昼食、菓子等、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、帽子、手袋、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳など（ルーペ・双眼鏡・各種図鑑）＊その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費用：保険代（300円） 申し込み：7月24日（土）まで

参加申込先：佐藤守（024-593-0188）へ電話またはメールにてお願いします（電話申込は午後7時～9時までお願いします）。

第112回自然観察会案内：的場川周辺のブナ観察会

日時：2010年9月26日（日）7：30～15：30

集合場所 四季の里交差点正面入口駐車場 集合時間 7：30 参加定員 20名

内容 土湯登山口からの的場川まで散策し、ミズナラ林やブナ林の紅葉を楽しみます。途中の振り沢では大ブナを観察します。的場川では恒例の芋煮会です。

準備品：昼食、菓子等、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、帽子、手袋、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳など（ルーペ・双眼鏡・各種図鑑）＊その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費用：保険代（300円） 申し込み：9月25日（土）まで

参加申込先：佐藤守（024-593-0188）へ電話またはメールにてお願いします（電話申込は午後7時～9時までお願いします）。

ふくしま森林文化企画展関連「森を未来へ」発信フォーラム開催について

当会幹事の山内幹夫さんと奥田博さんが講師を務める、「森を未来へ」発信フォーラムとその関連企画の写真展「森林力・ブナのカ～福島県のブナ～」が開催されます。内容は、以下の通りです。

「森を未来へ」発信フォーラム

期 日 7月17日（土）午前10時～午後4時 場 所 福島県文化センター2階会議室

講 師 新妻香織（フー太郎の森基金理事長） 奥田 博（山岳紀行家） 山内幹夫（福島県歴史資料館）

内 容 各講師の講演の後、意見交換会を開催いたします。

申込方法 参加は事前申込が必要です。電話にて申込み下さい。先着120名様まで（入場無料）。

申込先 福島県歴史資料館（TEL024-534-9193）

会員の皆様は、山内幹夫さんの自宅（TEL024-593-2555）への電話またはメール

（m-yamauchi@mx81.tiki.ne.jp）にて受付いたします（電話申込は午後7時～10時までお願いします）。

関連企画写真展「森林力・ブナのカ～福島県のブナ～」

期 間 6月19日（土）～7月18日（日）

撮 影 奥田 博

場 所 福島県文化センター1階「ルネサンス広場」

新年度の会費納入をお願いします：郵便振替02170-0-24351「高山の原生林を守る会」へ

第31回東北自然保護の集い

日時：10月30日（土）～10月31日（日）

場所：山形県鶴岡市羽黒町手向 会場 いでは会館 宿泊 宮田坊（修験の山 羽黒山の宿坊）

連絡先（申込先）〒999-7674 山形県鶴岡市箕升新田字西新田 75-1

佐久間憲生方（出羽三山の自然を守る会） TEL 0235-64-3854

訂正とおわび：会報72号「冬芽の表情」の「勇者」と「エジプトの王妃」の写真が反対でした。また、花紀行「ツクバネソウ」の「柱頭は長く、黄色から赤く変化する」は「柱頭は長く、赤から黄色に変化する」の誤りでした。訂正してお詫びいたします。

「高山」高山の原生林を守る会会報 第73号 2010年6月発行

編集・発行：高山の原生林を守る会 HP：<http://www15.plala.or.jp/adumatakayama/index.htm>

代表連絡先：佐藤 守 Phone 024-593-0188（夜間7時～9時）

郵便振替：02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」

入会方法：年会費（500円）を添えて上記まで

編 集：佐藤・奥田・鈴木